

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02644

研究課題名(和文)日蔵鈔本南宋刊王伯大『昌黎集音釋』と宋本『韓愈集』の研究

研究課題名(英文) Study on the HanYU-Ji in the Southern Song Dynasty and the Commentaries by WangBoda Being Transcribed and Kept in Japan

研究代表者

戸崎 哲彦(tosaki, tetsuhiko)

島根大学・その他部局等・名誉教授

研究者番号：40183876

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：『昌黎集音釋』40巻は世界文学史上著名な唐代の大文豪韓愈作品の、王伯大による註釈書であり、その存在は今日まで知られていなかったが、内閣文庫に林羅山手澤本が現存する。鈔本ではあるが南宋刊本に忠実である。王伯大の註釈には新旧の二種類があり、現存『朱文公校昌黎先生集』に附録する、従って今日使用されているのは旧注(1227年)であって該書は新注(1233年)にして旧注に見られないものは50%を越え、かつその大半が他の現存南宋諸本の旧注にも見られない。また、特に詩歌の巻が充実しており、今日の佚書である方崧卿『韓詩編年箋校』を多く利用している。本書は天下の孤本にして韓愈研究上第一級の史料である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

韓愈研究は今日に至るまで汗牛充棟の量を誇るが、王伯大『昌黎集音釋』はその存在さえ知られていなかった。今日の通行本、四部叢刊本の朱熹校訂『朱文公校昌黎先生集』に王伯大「音釋」を附録していたからであるが、それは宝慶三年(1227)南劍州刊本を底本とした建陽麻沙の書坊による改編本であり、現存する鈔本『昌黎集音釋』は紹定六年(1233)官刻本であって内容を全く異にする。その史料価値は、韓愈研究に止まらず、韓愈が世界文学史上にも列せられる文豪であることによって極めて高い。本研究では鈔本40巻6冊の全文を翻字し、現存する南宋諸本(残巻を含む)と逐一比較することによってそれらの特徴・関係と価値を究明した。

研究成果の概要(英文)：Fourty volumes of ChangliJi-Yinshi are commentaries on the works by HanYu, written by WangBoda. Though the existence of the books had been unknown until today, the manuscripts, owned by Hayashi Razan. They are copied manuscripts, they are the full copy of the original books from the Southern Song. There are two versions of WangBoda's commentaries. The ones are the books of the old version written in 1227. The manuscripts in Naikaku Bunko are the new version with annotations, more than half of which are not contained in the old version of the commentaries. Also, any other original commentaries from the Southern Song do not have most of the annotations in the new ChangliJi-Yinshi. The volumes of poetry are especially substantial of all the fourty columes, using many of the excerpts from the lost book, HanShi-Biannian-Jianjiao written by FangSongqing. ChangliJi-Yinshi is the one and only existing commentaries on the works of HanYu and superb historical materials for studies on the great HanYu.

研究分野：中国古典文学

キーワード：韓愈 王伯大 朱熹 昌黎集音釋 朱文公校昌黎先生集 方崧卿 韓文考異 韓集舉正

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

唐代の大文豪韓愈は世界文学史上にも位置づけられる作家として国の内外においてその研究は今尚盛んであるが、我が国の内閣文庫所蔵に、林羅山旧蔵の鈔本、南宋刊王伯大『昌黎集音釋』40巻六冊が現存することを発見した。『内閣文庫漢籍分類目録』は「江戸初寫」と鑑定するが、「江雲渭樹」なる蔵書印の存在によって朱子学者林羅山の手沢本であり、書写の時期は江戸の初期、あるいはその前に遡り、その渡来は、更に早く鎌倉時代、宋末元代にある。そのことは宋代の国諱を缺筆あるいは別字を代用している南宋刊本の忠実な鈔本であることから推測される。本書の存在は今日まで注目されず、したがって研究されることもなかった。

### 2. 研究の目的

『昌黎集音釋』は今日の通行本である四部叢刊本等の朱熹校訂『朱文公校昌黎先生集』に王伯大「音釋」として附録されているが、それは後に建陽麻沙の書坊が宝慶三年(1227)南劍州王伯大刊本を底本として改編したものであり、紹定六年(1233)臨江軍王伯大刊本『昌黎集音釋』とは全く異なる。本研究では紹定本の鈔本の複写を取得し、それを新しい史料として『韓愈集』南宋諸本の研究に加え、現存する南宋諸本の現存状態から始めて、諸本の成立と特徴、それら諸本の関係およびその固有の価値を究明することによって宋代『韓愈集』の全体像の再構築に迫り、韓愈研究に新たな局面を拓く。

### 3. 研究の方法

大きく二階梯から成る。(一)鈔本『昌黎集音釋』の研究：1、複写を取得し、全文の翻字を行ない基礎資料とする。2、『朱文公校昌黎先生集』は残本を含み諸本が現存するが、その関係の究明と選別を行なう。3、『朱文公校昌黎先生集』に附録の王伯大「(旧)音釋」と鈔本『昌黎集音釋』=新音釋との比較を行う。(二)南宋諸本『韓愈集』の研究：1、国内外に現存する『韓愈集』(残本を含む)についてその複写を取得(或いは閲覧)し、南宋本であること、成立過程を究明する。2、それら南宋諸本および『昌黎集音釋』との比較研究を行なう。3、『昌黎集音釋』の注文の出自、他の諸本との関係および特徴、固有の価値を考究する。

### 4. 研究成果

#### 01【張本】

**01：潮州劉允(?-1125)校刊《昌黎先生集》**、北宋の大觀(1107-1110)初。今佚。

総目と実収とに相違があり、それを反映する。現存本には偶に校注があり、北宋本の原形を最も保存している。たとえば巻02“《醉客》一首”の“客”字下に「一作“後”」と注するが《考異》及び《舉正》はその異文を指摘しない。**02：潮州官府重刊《昌黎先生集》**、高宗紹興九年(1139)刻。今佚。**03：張監稅重刊《昌黎先生集》**、孝宗淳熙元年(1174)刻於臨安府。現存。《集外文》一〇巻は総目では《外集》と称し、所収は所謂《遺文》に当たる。総目にいう《附外集》には《傳》《祭文》等の附録に当たるが、所収は「廟記」「後序」等を増補する。《外集》は特殊である。

#### 02【文本】

**01：文讜注《經進詳註昌黎先生文》**、高宗紹興十九年(1149)成書。今佚。**02：文讜、王儔注《新刊經進詳補註昌黎先生文》**、孝宗乾道二年(1166)後刻。現存。現存本は蜀中の書坊によって附録を増補して《柳集》と相前後して彙刊されたものである。(一)蜀刻本に《新刊増廣百家詳補註唐柳先生文》があり、版式は文本《昌黎先生文》と同一、字様、刀法も酷似する。(二)書名に“新刊”“詳補註”“文”と題する方法が同一。《宋蜀刻本唐人集叢刊》、《中華再造善本總目提要·唐宋編》(國家圖書館出版社2013年、頁536)を始め、今人は本書を《新刊經進詳註昌黎先生文》として扱うが、これは文讜本を指し、《新刊經進詳補註昌黎先生文》は王儔本であって二本は同一ではない。《新刊經進詳補註昌黎先生文》とすべきである。(三)註家は《新刊増廣百家詳補註唐柳先生文》と共通する。《柳集》巻首《新刊百家音辯詰訓柳文諸儒名氏》101名中、第86に「普慈文氏：名讜，字詞源，補註」、第100に「武信王氏：名儔，字尚友，補註。」“普慈”は潼川府路普州。“武信”は遂寧府、杜莘老が知府であった。王儔は当時“致仕”して郷里に在った。文讜の同郷の先輩に当たる。(四)文本巻首《序》《表》後に《目錄》あり、《正集》四十巻、《外集》十巻、《遺文》三巻、さらに《韓文公志》三巻には收誌、碑、傳、廟記、序、

祭文等を収めて資料性が高い。《遺文》三卷は《論語筆解》二卷を含み、貴重。《韓文公志》三卷は樊汝霖《韓文公志》五卷による。(五)ただ校勘においてはやや劣り、後出の魏本には及ばない。(六)現存本は蜀中の書坊に違いないが、韓醇《話訓韓文》を参用している。たとえば《召大顛和尚書三》題下注「公《與孟簡尚書書》云……。今世刊本皆存之用，不敢削。」と同文は魏本で“韓曰”として見える。しかがって韓本の淳熙四年(1177)以後の刻書。韓醇は《新刊百家音辯話訓柳文諸儒名氏》101名中にも見える。書坊は未詳であるが、《新刊百家音辯話訓柳文諸儒名氏》第100王儔の後に「陳氏：名鶚，字一飛，音釋」の一行があり、陳鶚との関係も考えられる。待考。

### 03【祝本】

**01：祝充《經進韓文音義》一卷** 孝宗乾道元年(1165)潭州岳麓書院刻、今佚。祝充は江西衢州江山縣文溪の人、字は一に“季賓”、一に“廷賓”に作る。毛叔度(1106-1170)、字季中、衢州江山の人、祝充の同郷の先輩。張杓(1136-1205)は潭州の名士、孝宗朝宰相張浚(1097-1164)の次子、張栻(1133-2013)の弟。隆興二年(1164)、張栻等は潭州寧郷縣に帰葬し三年守制するから、この時の刻書であり、乾道元年(1165)に湖南安撫使劉珙(1122-1178)が岳麓書院を重修し、張杓が書院教事に当たり、三年に朱熹が講学しているから、岳麓書院の再興と関係があろう。

**02：祝充《〔經進〕韓文音義》五〇卷** 今佚王應麟(1223-1296)《玉海》に「《音義》五十卷，祝充進于朝。」《宋史·藝文志》に「祝充《韓文音義》五十卷。」五〇卷とは《韓集》正集四十卷と《外集》十卷。現存本は《韓集》正集四十卷，《外集》十二卷の五十二卷であり、《遺文》一卷と《傳》等一卷を《外集》卷十以後に収める。五〇卷本には《遺文》等を収める。祝充《音義》は一卷本であり、後に《音義》を解体して集本の正文下に編入して五〇卷としたもの。魏本《諸儒名氏》“全解”本とはこれを指す。潘緯《柳文音義》も一卷の單刻本であり、後に建陽書坊劉怡堂によって輯注され、正文下に配して《柳文》四十五卷とされた。**03：祝充《音註韓文公文集》五二卷** 光宗紹熙(1190-1194)初、浙中書坊刊現存本は五十二卷本で、卷首に趙德《文録序》、李漢《文集序》と《目錄》一卷あり、正集四十卷、《外集》十二卷。《外集》は他本に異なり、極めて特殊である。(一)類目による分卷：前に《雜文》一卷、《書》一卷、《序》一卷、《雜文》二卷、曾鞏跋、《順宗實録》五卷の十卷があり、後に卷十一《遺文》十八篇と卷十二“《傳贊後序》等十三篇”を附録する。《外集》一〇卷に書坊が《遺文》二卷を増補した。(二)曾鞏跋が《外集》卷五末(《順宗實録》前)にあり、「子開(曾鞏)云：文公《外集》五卷，疑當時李漢有所不取，亦疑有假冒失真者，如《雷塘禱雨文》見於《柳子厚集》。此所載不可讀，以柳文校正十七處始完。《直諫表》、《論顧威狀》，別本注云“亡”。此本獨收，非文公所為無疑也。」という。《雷塘禱雨文》題下に「此文見《柳子厚集》。洪曰：“子厚所作，此本舛誤，不可讀。”」“此文見《柳子厚集》”一文は張本にも見え、曾鞏の所注である。祝本卷五末に“《直諫表》、《論顧威狀》”を収め、《直諫表》題下に「洪〔《辨證》〕曰：“《直諫表》、《論顧威狀》，舊本無之，好事者編入《別集》。觀其文，決非退之作。公在穆宗朝……”」という。同注文は文本、魏本(南圖本)にも見え、同一系統であることが知られる。(三)《外集》は張本と異なり、文本・魏本に近い。しかし魏本は“祝曰”を引くが現存本《音註》としばしば異なり、しかもさらに詳細な例があり、傅增湘は二本を對照して「今所傳之宋本(《音註》)乃祝注之節本也。仲舉(魏本)采輯時所據之本乃全本。」とするが、朱熹《考異》も祝注を用いており、しかも異なる。五〇卷本も一卷本と必ずしも合致しない。

### 04【浙本】

01:《昌黎先生文集》 孝宗朝(1162-1189)中期浙中刻 残本。(一) 白文無注。偶に注あるも多くが校語であり、張本と一致するもの少なくない。(二) 浙本は未だに《舉正》を用いていないから、それ以前の刊行であると考えられる。浙本、張本はともに多く文本の所謂“舊註”を留めている。

#### 05【閩本】

01:《昌黎先生文集》 孝宗朝(1163-1189)閩中刻 残本(一) 趙希弁《郡齋讀書附志》に「《昌黎先生文集》四十卷、《外集》三卷、《順宗實錄》五卷、《附錄》三卷」を著録。饒本あるいはその系統本である可能性が高い。饒州は江西鄱陽縣であり、“江本”(後出)と関係がありはしないか。(二) 毎巻首に本巻所収を示す目録を備える。張本と同じであるが、首数を示さず。白文無注本であるが、偶に注あり、多くが校語である。張本、祝本と同じものがやや多い。(三) 浙本と同様に当時最も流布していた《舉正》が用いられていない。それ以前の刊行。

#### 06【舉正】

01:方崧卿《韓集舉正》 孝宗淳熙十六年(1189)初刻 現存 【南宋本】日本・大倉集古館藏、汲古書院2002年影印出版。現存本は《韓集舉正》十卷、《外集舉正》一卷、《韓集舉正敘録》一卷、書後に自序あり 02:《韓集舉正》 南宋重刻 今佚。朱熹《考異》紹定二年(1229)張洽刊本が引く“方曰”は多く現存南宋本《舉正》と異なり、明らかに別本が存在した。現存南宋本には明らかに追補が認められる。朱熹《考異》は往往にして現存南宋本《舉正》と異なる。

#### 07【方本】

01:方崧卿校定《昌黎先生集》 淳熙十六年(1189)刻 残存(一) 毎題下に首数を示す。唐本の原形を伝えている。(二) 版式、刻工名は南宋本《舉正》と合致することから淳熙十六年南安軍方崧卿彙刊と認められるが、諸本との緻密な校勘とそれを経た定本との間に不一致が見られる。(三) 朱本《外集》巻首の注によれば、《遺文》一卷は方本にも存在したはずであり、さらに石本《與大顛師書》三篇等を含む『石刻』が附録されていた。

#### 08【江本】

01:輯注《昌黎先生文集》 光宗紹熙間(1190-1194)江西刻 残存 注文は祝本注と同じものが多く、必ずしも《舉正》、《考異》に従っていない。朱熹はこれに拠ったのではなく、ほんらい張氏刻の岳麓書院刻本である祝本を用いていることに由る。

#### 09【眉本】

01:《昌黎先生文集》 紹熙間(1190-1194)蜀中眉山地區刻 現存 蜀本系統であるが、監本・慶曆本・王欽臣本・呂大防本等を用いて異文が多く、貴重である。ただし訛誤が少なくない。坊刻による。眉本は特殊であるが、文本にやや近い。

#### 10【考異】

01:朱熹《韓文考異》 寧宗慶元三年(1197)或五年(?)刊於潮州 今佚

02:重刊《晦庵朱侍講先生韓文考異》 南宋刊於建陽(?) 現存 【南圖本】

朱熹卒後に建陽あるいは崇化書坊が重刊した可能性もある。《外集》、《遺文》を備えているはずであり、南圖本の編巻つまり巻9と巻10の構成では缺落、散逸したのではなく、明らかに原本にそれらがなかったのであり、祁本と全く異なる。 03:鄭性之重刊《韓文考異》 寧宗嘉定元年(1208)刊 今佚。 04:張洽重刊《昌黎先生集考異》 理宗紹定二年(1229)刊於池州 現存【祁本】 現存南宋本《考異》二種は版本を異にする。書題がそうであるが、編次、文字も異なる。

#### 11【朱本】

01：朱熹校定《昌黎先生集》 寧宗慶元三年(1197)或いは五年、潮州刊 今佚 02：朱熹《校定韓昌黎先生集》 南宋、建陽(?)刊 今佚。南宋時に朱熹校定《昌黎集》と称されるものはしばしば刊行されており、少なくとも三、四種が存在した。(一)紹定二年(1229)、朱子門人張洽の重校、池州刊。(二)王伯大輯註《朱文公校昌黎先生集》。(三)朱子門人鄭性之重刊。

#### 12【魏本】

01：魏懷忠輯註《新刊五百家註音辨昌黎先生文集》 現存 【南圖本】魏本は祝本をはじめとする旧注本を広く集めて網羅的であり、現存する南宋輯注本中で最も詳細。現存の南圖本は原刻本ではない。

#### 13【王本】

01：王伯大輯註《朱文公校昌黎先生集》 寶慶三年(1227)南劍軍刊 今佚。 02：宋建陽書坊改編重刊《朱文公校昌黎先生集》 12行21字本 残存

#### 14【池本】

01：張洽重刊《昌黎先生集》 理宗紹定二年(1229)、池州刊 残存

#### 15【臨本】

01：王伯大重刊《朱文公校昌黎先生集》 紹定六年(1233)臨江軍軍學刊 残存

#### 16【《音釋》】

01：王伯大輯註《昌黎先生集音釋》 紹定六年(1233)、臨江軍軍學刊 今佚 (一)鈔本は《序》と本文のみ。《外集》一〇卷、さらには《遺文》一卷を備えていたと考えられる。(二)臨本の校注は現存の王本に99.9%以上含まれる。(三)王本・音釋本は朱熹『考異』とは完全には一致しない。王本・音釋本は完全な朱熹校定本ではなく、王伯大の判断も加味されている。(四)『音釋』はまず作品の題名を掲げるが、『考異』および『舉正』と異なる例が多く、さらに王本の篇目も巻首の総目に掲げる所と多く異なる。別に拠る所があるはず。(五)《音釋》は王本の旧音釋の大幅な増補であり、旧音釋は多く魏本に拠り、新音釋は多く「方曰」を引く。佚書である方崧卿『韓詩編年箋校』からの引用として極めて貴重。(六)新《音釋》は宋人の評論(多くが佚文)の他、『太平御覽』『藝文類聚』等の類書を、字書は『廣韻』の他に『集韻』を、『文選』では五臣注本を使用。また、洪興祖『辨證』(今佚)に直接依拠している。(七)祝本→魏本→王本→音釋本→廖本の継承関係が想定される。(八)廖本の注には音釋本のみと共通する例が若干見られる。「元和聖德詩」「城南聯句」「秋雨聯句」「遠遊聯句」「雜詩」等。(九)李朝にも流布していた。長文の注(「鄆城晚飲」中)が李朝鮮・李晬光(1563-1628、号芝峯)撰の類書『芝峯類說』(萬曆四二年1614)卷八「文章部一・古文」に引用されている。

#### 17【廖本】

01：廖瑩中輯註《昌黎先生集》 現存 定説では度宗“咸淳年間(1265-1274)刻本”とされるが、理宗朝(1224-1264)の刊行。最も保存状態が良好であり、字様も精緻にして避諱も厳格であり、注も比較的充実している。中には現存に見えないものもあり、おそらく自説も加えられている。これらの点からみて、廖本は王本で代替されるべきものではなく、《韓文》研究上、等閑視すべきではない固有の価値を有する。

#### 18【全詩】

明らかに宋本を用いており、しかも側注が意外と多い。異文校語の他にも、注音、訓釋、考年等に及ぶものがある。史料的价值は無視できない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 戸崎哲彦	4. 巻 22-上巻
2. 論文標題 《五百家注昌黎先生集》南宋本有幾種 《韓》《柳》二集合刻本與日本覆刻本之間	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 古典文献研究	6. 最初と最後の頁 93-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸崎哲彦	4. 巻 4 1-1,2
2. 論文標題 唐代台州刺史與日僧最澄 唐詩在日本	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 台州学院学报	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸崎哲彦	4. 巻 45
2. 論文標題 最澄と陸淳(上) 『台州相送詩』と『顯戒論縁起』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 島大言語文化	6. 最初と最後の頁 1-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 戸崎哲彦	4. 巻 46
2. 論文標題 最澄と陸淳(下) “邊州”の儒佛交渉と陸淳門下およびその韓愈門下との相反	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 島大言語文化	6. 最初と最後の頁 1-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 戸崎哲彦	4. 巻 23
2. 論文標題 日本鈔本紹定六年臨江軍刊王伯大《昌黎先生集音釋》與方崧卿佚書《韓詩編年箋校》	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中國詩學	6. 最初と最後の頁 10 55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 戸崎哲彦	4. 巻 44
2. 論文標題 南宋鄭定刊『重校添註音辯唐柳先生文集』考(下)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 島大言語文化	6. 最初と最後の頁 1 39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 戸崎哲彦	4. 巻 43
2. 論文標題 なぜ石本は信頼できないのか	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 島大言語文化	6. 最初と最後の頁 1 38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計4件(うち招待講演 0件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 戸崎哲彦
2. 発表標題 《五百家注昌黎先生集》南宋本有幾種 《韓》《柳》二集合刻本與日本覆刻本之間
3. 学会等名 中國唐代文學會(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 戸崎哲彦
2. 発表標題 唐代台州刺史與日僧最澄 唐詩在日本
3. 学会等名 浙東唐詩之路國際學術會議（國際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 戸崎哲彦
2. 発表標題 南宋鄭定刊《重校添註音辯唐柳先生文集》現存修補本探考
3. 学会等名 中国柳宗元國際學術研討会（國際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 戸崎哲彦
2. 発表標題 佚與偽之間 以柳宗元佚詩為考察對象
3. 学会等名 中国柳宗元國際學術研討会（國際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----